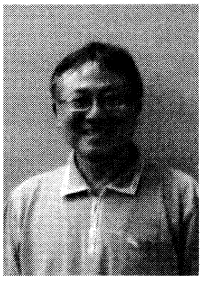
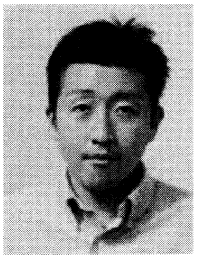
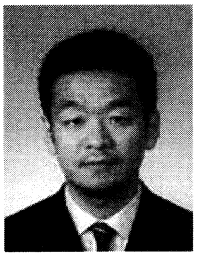
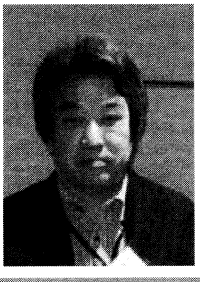
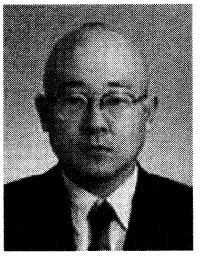
第12回経験交流会
演習科目の指導法
―卒論指導を中心として―

日 時: 11月2日(水) 14:55～16:25
場 所: 会議棟大会議室
形 式: パネルディスカッション形式

パネリストの基本情報			
氏　名 (所属学部)	酒井　敏 氏 (文学部)	白井 正敏 氏 (経済学部)	金　敬黙 氏 (国際教養学部)
卒論担当学部 (年間指導者数)	文学部(18名)	経済学部(22名)	国際英語学部(16名)
専門分野・指導分野	児童文学・文化を含む近現代日本文学・文化／メディア・リテラシー	財政学	グローバル化と社会貢献
			
風間　孝 氏 (国際教養学部)	栂　正行 氏 (国際教養学部)	長滝 祥司 氏 (国際教養学部)	安村 仁志 氏 (国際教養学部)
社会学部(15名) 国際英語学部(11名)	国際教養学部(11名) 国際英語学部(10名)	国際教養学部(11名)	国際教養学部(7名) 現代社会学部(20名)
社会学、ジェンダー／セクシュアリティ論 (フィールド調査を含む)	英語文学	哲学、応用哲学、認知科学	ロシア正教会史 ロシア文化・比較文化

企画:中京大学国際教養学部教育事業推進委員会
後援:中京大学FD委員会

中京大学　第12回経験交流会

演習科目の指導法—卒論指導を中心として—

日時：11月2日（水）14：55〜16：25

場所：会議棟大会議室

形式：パネルディスカッション形式

司会（六車）：

それでは時間になりましたので、第12回経験交流会を開催させていただきます。

司会を務めます六車です。よろしくお願いします。

経験交流会は、先生方に授業の内容・方法を公開していただいて、教育経験に基づいて意見交換を行うことで、個々の教員の授業改善につなげていくことを目的として開催しております。今年度は、国際教養学部の初めての4年生が卒業研究をまとめている最中であることから、現在卒業論文を指導中の、また卒業論文を指導された経験をお持ちの先生方をパネリストにお招きし、経験交流を行うことになりました。

タイトルに「演習科目の指導法」とありますが、今日お話ししていただく内容は、卒業論文指導だけではなく、基礎ゼミを始めとするほかの演習科目にも十分応用できるものと確信しております。

それでは、いきなりですが北川学長にお越しいただいておりますので、一言ご挨拶をお願いいたします。

北川学長：

今日で第12回ですか。昔の教養部の時から、こうしたFD活動をお進めいただき、これが今日の中京大学のFD活動の大きな柱になっているものと思っております。時代の先を見越したご活躍で大変ありがたいと思っております。

さて、本日予定の安村先生には、上海での高校と連携する大学仲間に入れてもらえるということで、東京へ急なご出張を私に代わって行っていただいております。結構面白い話が学部長・研究科長会を通じて出てくるものと期待しております。

さて、私も5年前までは、教員の1人として、こうした卒論生あるいはゼミ生を持っておりました。1学年15人ぐらいでした。私の場合は今日お話になる方々とは違いまして、専門が自然科学系のため、実験をして何かデータを取ることが卒論やゼミの中心課題でした。したがって、指導体制に大学院生が関与するという点が今日お話になる先生方とは違うかな、と思っております。

そこでいつも感ずることですが、いわゆる講義の時ではおとなしい学生も、実験となりますと生き生きしています。大学に来てよかったなという顔が学生に出てくるのが、こうしたゼミとか卒論の時ではないかと思い、私も嬉しくなってきます。

今日は本当に貴重なお話を聞けるいい機会ですが、最後まではおれません。できるだけお話をうかがって退出したいと思っております。

最後となりますが、今日パネルディスカッションにご参加の先生には心よりお礼を申し上げますとともに、こうした活動を長く続けてこられました国際教養学部に対して厚く御礼申し上げます。

本日はどうもありがとうございました。

司会：

ありがとうございました。

今日の経験交流会は、前半はパネリストの先生方に５分程度で卒論指導の概要をご説明いただき、後半は質疑応答とさせていただきます。前半と後半の間に５分ほど休憩をいただき、その間にアンケートを回収します。

では、風間先生→栂先生→金先生→長滝先生→酒井先生→白井先生の順に概要をお願いいたします。

風間：

国際教養学部の風間です。女性学を担当しています。

以前に社会学部で15人を対象に卒論指導したことと、昨年度在外研究にいかれた先生のピンチヒッターで国際英語学科４年生11人に卒論指導をしたことがあります。

今日は国際英語学科のときの経験を基にお話しさせていただきます。

まず、１年間だけの指導でしたが、４年の春学期にやったことから話したいと思います。

最初に第１回目のときにルールをつくりました。

年間を通じてセメスターの欠席は４回以内に抑え、それに合わせて就活をしてくださいと伝えました。

担当して１年間でジェンダー／セクシュアリティに関する卒論を書くということになっていましたので、ジェンダーについての基本的な文献を３冊ほど提示して、その中で学生からどれが読みたいか意見を聞いて、一番多かったものをテキストにして、文献購読から始めました。

次に図書館ガイダンスを一回入れました。社会学部で指導したときにインターネットの引用だけで卒論を書いたという学生がいまして、これはさすがにまずいだろうと考え、ただ私自身もきちんと文献の探し方、論文の探し方等を教えていなかったということもあったので、図書館ガイダンスを入れたわけです。OPACだけではなくて論文検索のデータベース（GeNii）、新聞記事のデータベース（知恵蔵、EL-NET）などを使えるようにしました。

そのあとに、データベースを使って論文を検索してもらって、毎週２本ずつ購読するということをしました。ちょっとハードだったんですけれども、おおまかに卒論のテーマを決めて、それにかかわる文献の検索をするということをしました。それが春学期の進行でした。

次に秋学期ですが、最初に卒論のテーマ発表をしてもらいました。このときは、大まかなテーマと、それを取り上げた理由、どういう題材・素材を使うのか、ということを10分ぐらいで話をしてもらい、みんなで意見交換をしたわけです。こういう切り口でやったら

面白くなるんじゃないかとか、こういう切り口はどうだろうかということを、ブレインストーミングのような、相談し合うような会を１人30分程度でやりました。

次に、卒論の全体骨子の発表をしました。ここでは、前回よりもう少し時間を増やして発表20分、討論25分というかたちでやります。そのときに、コメントカードを活用しました。これについてはあとで補足します。さらに、その後に関心が近い学生ごとに３人から４人の小グループをつくりまして、ゼミ室の中で分かれて、そこで原稿を読み合うことをしてもらいました。互いの原稿を少人数のグループ内で読みあいお互いどう思うかコメントをし合いました。こうして卒論提出に至り、最後の締めくくりとしてゼミ内での卒論発表会を行いました。ただ、ゼミ生以外のオーディエンスがいるともっと緊張感のある会になったと思いますね。

本来であれば卒論テーマの発表というのは春学期中にやりたかったんですけれども、予定よりも時間がかかってしまい、秋学期の冒頭にくいこんでしまったのが反省点です。

４年生の春学期というのは就活でゼミが成り立たないという話もよく聞きましたし、以前に社会学部を担当したときも、あまり出席者が集まらなくてゼミが成り立たないというようなこともあったんですが、ちょっと強引かもしれませんが、『欠席４回までルール』をつくったことでどうにか成り立ったと思います。

次に工夫していることについて話します。

コメントカードというのを配っていました。

これは基本的に発表が終わった後、それぞれ聞いた人がコメントを書いて、それを最終的には報告した人に渡してあげる。それを読むことで自分が発表した内容に対するリアクションというのが返ってくるので、ある程度モチベーションが上がると思っています。

グループ分けについては先ほど話したのですが、グループ分けをした理由について補足します。どうしても卒論の追い込みの時期になりますと、卒論を一方で書きながら発表用のレジュメをつくるというのは二度手間になるのではないかなと思ったことと、少人数のほうが発表の機会も増えるというのが理由です。

最後に重視していることとして「対等性と自主性」と書いたんですけれども、私は教員なんですが、一参加者としてできるだけ参加するように心掛けました。

たとえば、先生が座っている。先生のところを飛ばして最後に先生がコメントするというのではなくて順番にコメントをしていく。そういうかたちで、対等というのは教員と学生という関係上不可能ではあるのですが、できるだけ対等に近いようなかたちをつくることを心がけました。こういう方向がこのテーマに関しては正しいんじゃないか、望ましいんじゃないかということをなるべく押し付けず、学生のモチベーションをできるだけ尊重するようなかたちを目指しました。

また、テキストの選択、ゼミの進行・司会を学生にやってもらうことで、自分たちでゼミを運営しているというような雰囲気をつくるということを全体として心掛けました。

以上です。ありがとうございました。

栂：

10月は複数の学会の理事会に出席して、学会の停滞話ばかり耳に入りました。本日はその影響下から脱する機会と考えています。

ただうれしいニュースもあり、この土曜日に静岡市で大道芸ワールドカップの審査員をすることになっており、３時間２クール、トイレ厳禁で外国人のパフォーマンスを堪能します。体育学部の学生にそれを話したところ、大変誉めてくれまして、いい大学だなと思いました。その週末を楽しみに本日はあまり興奮しない程度に話をさせていただきます。

最近はいろんな委員会があり気楽に口がきけなくなり、研究教育の低迷を招いていると感じます。それはそれとして以下の発表に不穏当な部分がありましたら、撤回しますのでご指摘ください。

ハンドアウトに従って説明していきます。

（１）、なぜ演習か。

教養部が国際教養学部となってから積極的に演習に取り組む方と、そうでない方に色分けできるという状況が生じました。

私は昔から文化系では演習こそ大学教育の核と考えてきましたので、機会があるごとに手を挙げております。

学生との演習がありがたいと思いましたのは、オープンカレッジで10年近く翻訳講座を実施し、ほとほと疲れたという経験があります。

（２）、国際英語学部 英米文化学科の演習で何をしているか。

顔写真つき案内に演習の学生数10名とありますけれども、これは英米文化学科の定員を10名と定めているからです。

ここではイギリスの18世紀から21世紀のカノン、つまり古典を勉強しております。

学会の方々に聞かせたら泣いて喜ぶような作家ばかりが占めています。

というのも現在、オーソドックスなイギリス小説を読む院生が少なく、学会ではそうした方面が低迷状態にあるからです。

しかし、その原因はたぶん英語なら就職が何とかなるだろうと考えて教員になる人が後を絶たないからです。文学が元々好きではない、ないしは途中で好きではなくなった人たちが結構います。

（３）、就職試験の面接で卒論のテーマをきかれたら英米文化学科の学生は何と答えるか。

そこで演習中にさりげなく、この問いを発してみました。

すると、１人の学生がある作家の名前を挙げ「１人の作家、あるいは作品を丁寧に鑑賞し理解することは必ず人間理解につながる。それは就職という一見短期的なハードルを越える上で不利とも見えるが、長い目で見れば得をすること大である」という答えが返ってきました。

これに感服しました。

事実、彼らは会社に入っても十分に大学で学んだ基礎を活かし、自らの応用力をもって

目の前の問題を解決しています。

ただし、その先、大企業で、二桁単位で退職者が出るという実態がある現状では、大学はただ学生の就職が決まればよいというわけにもいかず、ここから俄然国際的教養の意味が出てきます。

（4）、国際教養学部の４年生に同じ質問をする。

「卒論、あるいは学校でどういうことをやったか」という質問です。これは４年生の４月に行いました。

ある学生が当初、卒論テーマにルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』を挙げました。別の学生がシェイクスピアの『十二夜』を挙げました。

こうして、テーマらしいものを皆が出したところで、件の質問をぶつけてみます。

すると『不思議の国のアリス』の学生は「世界で伸びるイギリス製品ダイソン」に、シェイクスピアの学生は「イギリスの食料自給率」とテーマを変えてきました。

その変わり身の速さには驚きました。

ほかの学生もこれを見ていて、モーリス・ミニクーパー、スターバックス研究、イギリスファッションの歴史、ディズニーワールドの研究などの卒論を書いています。

２つの学部の学生を前に就職の面接という一石を投じたところ、まるで反対の結果が出ました。

さて、その結果に対する私の感想は、ハンドアウトに書いておきましたので、時間もございませんので、それをお読みいただければと思います。

ただ最後のところ、就職につながる学生に共通する資質は反応のよさであると私は考えます。教員の質問に適切な答を出す、教員の指摘に修正案をすぐ出す、他の学生の発表に問題点を発見する、的確な質問をするなど、これらは当たり前のことで、考えてみれば我々学生のころから変わっていません。

最後に、こうした能力に著しく欠ける人間、空気が読めない人間。これは実は私たち大学教員であるのかもしれないと反省と自戒の言葉をもって私の発表を終わります。

金：

ハンドアウトにもありますけれども、私は国際英語学部でゼミを担っておりまして、そこでグローバルな問題をローカルな分野から取り組むことができるような市民になるというゼミのゴールが明確にあります。

その中でゼミのキーワードというのは、こちらのポスターにもあるようなグローバリゼーション、ＮＧＯ、社会貢献、市民活動ということになっています。

それを前提にしつつ、国際英語学部のゼミの特徴は、他の学部もそうかもしれませんが、３年生から４年生まで２年間、または国際教養学部は３年間ですけれども、持ち上がりで担当し、卒業論文が学部にとっては必須になっています。

これは大学または学部によって異なると思いますけれども、ピアによるゼミの運営というシステムが導入されております。

ゼミにおける卒業論文をどう位置付けるかということなんですけれども、学生が本当にそのように受け止めてくれるかは別として、最後の集大成として、やはり論文というのは他人に読んでもらうことがテーマになりますので、それを楽しむための執筆の姿勢、モチベーションを抱きましょうということになります。

それを前提にローカルルールをいくつか設けておりますが、ディシプリンをどうするかということにおいて、私が兼担している理由は国際関係論などの社会科学系の部分を担ってほしいという要請によるものなので、前提としては社会科学の論文を１つのモデルとしております。

大いに学際的であることはいいことですし、またディシプリンという言葉自体が学部生にはそれほど浸透していないという現状からも、結果的に学際的なスタイルの卒業論文になるということは避けられません。

このような状況なんですけれども、学部では14000字以上ということになっています。ここでは社会科学系の論文を書かせるということで20000字のルールを求めておりますが、過去４年間・５年間、誰１人それに従うことのできない人はいませんので、それほど難しいことではないと思います。

あまり細かいことを１つずつ説明しても仕様がないと思いますけれども、個人的に過去数年間の卒論指導で感じるのは、問題を解決するためには問題そのものが存在しないと解決できないわけでして、問題意識がない学生がどのように問題意識を探すかということが一番の難しさだと思います。

たくさんの問いをつくってくださいという中で、私が訓練を受けた論文の書き方、問いの見つけ方というのは、基礎科学としてのwhy（なぜだろうか）ということで仮説を立てて、「なぜならば」という結論に導くような訓練を受けてきたので、how・what・whoなど、いくらでも答が調べることによって簡単に出るようなものではなく、とにもかくにもなぜだろうかという、いいクエスチョンをどう立てるかということを前提にさせておきます。

どのような質問においても、組み替えてwhyという質問から始めるようにしなさいという訓練をさせるんですけれども、ここが一番重要でありながらもなかなか難しい。

それはいろいろな理由が隠れておりますが、先行研究批判。そもそも何が学術書で何が普通の一般図書なのかを区別できない学生が増えている中で、そのような基礎的な訓練をさせることには明らかに毎週90分では時間が足りなくて、結論的な要望、あるいは夢物語としてはもう90分あるともう少し質は高まるのかなというふうにも思ったりして、こういうことを夢見ながらどうするべきなのかというふうに考えております。

いずれにしても、グローバリゼーションと社会貢献というテーマで自由に組んでいいですよと言うのですけれども、必ずいいテーマを見つけるためには自分の趣味なり自分の問題意識とつなげなさいということ、それを就職活動なり、あるいは何らかのかたちで活用できるかたちでしていただきたいというふうに訴えつつ、いくつか細かく書いておりますが、私が学生に例え話で言っていることは、卒業論文を書くことは初めての家を建てるこ

とだという言い方をしています。

設計図面というのは目次に例えておりまして、結論的な部分で学生たちは序文、あるいは序章でずいぶん時間を食ってしまうんですけれども、序論とか序章というのは家で言えば玄関。工事が全部終わって、内装が全部終わってから玄関の扉を付けるものだから、序章は最後に書くものだというふうに話をしながら、初めての家はいくら頑張っても上手に建てることができないので、あまり欲張りすぎずに先輩や後輩に読んでもらうことをゴールにしながら前年のゼミ生よりもよく書くことをゴールにしなさいということで、ひとまず説得と試行錯誤を繰り返しております。質疑応答でまた補足いたしますが、以上です。

長滝：

国際教養学部の長滝と申します。専門は哲学、認知科学などをやっております。

僕は慎重に時間をかけて３年の春学期から始めました。１年半ぐらいかけてやりました。

最初は関心が近い学生たちにグループを組ませて、みんなが卒論に対する問題意識を持てるような状況をつくりました。そのことを基にして各自が３年生の春学期の終盤に卒論のテーマを一応決定して、ここは金先生と違うんですけど、前書きの部分を提出してもらいました。そこで目的をはっきりさせる。そのあと、前書きプラスアルファのものを最初に提出させました。これは、訳も分からずダラダラ書き始めないように、目的意識をはっきりさせるということです。夏休み明けにそれを基にして、10 枚程度のレポートを提出してもらうというふうにしました。

それを基にして、秋学期の前半では１時限に２名ずつ提出済み 10 枚毎のレポートを基に発表を行って、他のゼミ生全員から質問・コメントを受け取るということをやりました。発表者は他のゼミ生からの質問・コメントを前もって見て、それに対する回答を準備するようにしたのです。ゼミが火曜日にありますので、日曜日までに全員が発表者の原稿を読んで僕のところにメールで質問やコメントを送ってきます。僕はそれをまとめて発表者に転送して、それに対する回答を用意してもらって、火曜日のゼミで発表してディスカッションをする。以上を週に２人ずつやっていきました。

後半では発表を終えた者から順に 20 枚分のレポートを提出するようにしました。20 枚のレポートを基にして発表を行う。これも同じような形式にしました。このあたりで卒論として仕上げるときの形式的なことも意識してもらうことも含めてサンプルを配布したりもしました。この時点でテーマを変える者なども出てきました。３年時の秋学期の終わりに 30 枚以上の原稿を提出するというのを４年時の春学期の直前までにしました。

引用文献については、10 本以上の文献から引用する、翻訳文献は原本を参照する、翻訳のない外国語文献を１つ以上使用する、といった指定をしました。この時期にもまだテーマを変える者が出たりもしました。

４年生の春学期は、提出した 30 枚を基にして１時間に１名ずつ発表してもらいました。これも同じような形式で、各学生が全員の論文を読んで、それに対する質問とコメントを提出して議論をしました。このときには１人１時間使いますので、30 枚分をすべて音読し

ろと言いました。パワーポイント全盛の中で全文音読というのはほとんどアナクロなやり方ですけれども、実は自分の文章を反省的に捉えるのに非常にいいのです。この作業を通じて各自が自分で書いた文章のおかしな所に気づくことができるようになります。そして、この発表を基にして改訂を加えた原稿を最初の完成版として９月の中旬ごろに提出させました。

秋学期は１時限に２名ずつ程度、個別指導を行っています。それに基づいた改訂版を順次提出させて、メールによる指導も随時行っています。いま、バージョン８とか９とか、そのぐらいまでできています。

これだけ周到にやっても、やはり途中でテーマを変えたりとか遅れてくる学生というのは何人かいまして、中にはもう卒業できないことが単位の関係できまってしまっている学生はモチベーションを失っているとか、そういうのもあったりして２～３人ほど遅れています。

自由に選べと言ったものですから、テーマ的には非常に多岐にわたりました。たとえば、「人格の同一性と自己所有」、「現代医療と倫理」、「ダンスと身体」、「学歴格差と格差社会」、あるいは「ゲーテの色彩論」、「愛とエヴァンゲリオン」など、いろいろあります。ただ、僕の専門が哲学なので、基本的にはただ事実を並べるだけでなく、しっかりとアーギュメントになっているかどうか、ということを見るようにしました。また、論文の中で、自分の主張がありそれについてちゃんと根拠を示せているかどうか、注の付け方とか細かいことをしっかりやっているかどうか、といったことをうるさく指導しました。大まかな印象ですが、僕の指導にきっちり応えてくれる学生は、相対的に就職活動も早く終わっていて、メールの書き方１つでも、いくら言っても直らない学生は就職活動をまだやっていますというような感じです。どうもありがとうございました。

酒井：

文学部の酒井でございます。

私だけハンドアウトが手書き、かつ縦書きで、アナクロニズムと思われるかもしれませんが、実はこのレジュメの書き方は、私がゼミ生に共通フォーマットとして「このように書け」と言っている統一書式であります。

「はじめに」のところで何をやりたいか目論見をはっきりさせ、次に発表要旨を書く。冒頭のタイトルが一番短い言葉でのその発表の要約ですから、次の段階として全体像を示して聞く準備をさせるわけです。その上で発表手順を示して、さらに具体的に心の準備をさせる。発表本文で、その論理的な展開ができるかどうか。最後にまとめを行って使用テキストと参考文献を挙げる、というスタイルです。実際にはこのフォーマットの「発表本文」の部分が伸びて何枚にもなります。

このフォーマットは、これを見ながらそのままレポートが書けるという点で要領がよく、自分の学生時代から大学院時代を通してこのフォーマットを使ってきて、それを今学生に強いているわけです。

今抱えている大きな問題は、国文学科１学科体制から日本文学科・言語表現学科の２学科体制に移行して、学生たちの研究テーマが大きく変わり、多様に広がったことです。

国文学科の時代には、ゼミでは基本的に明治時代・大正時代の短編小説を読む。それが３年の前期・後期の課題で、各期に400字詰め原稿用紙10枚以上のレポートを要求し、赤ペン先生と言われますけれども、赤・緑・青、さらに鉛筆まで使って丁寧に添削して返します。その上で４年の前期に長編小説を読ませ、それで夏休みの課題として卒業論文の一部または全部を書いて提出せよ。それに基づいて後期に中間報告をやってもらう。そうした実践の結果として国文学科時代の最後の年に提出された卒論テーマの一覧を挙げておきました。

２学科体制になってからは、言語表現・日本文学両学生とも興味を持てるように、３年の春学期には映画と小説の比較研究によってメディアによる表現手法の違い、それぞれの得手不得手を理解させた上で、秋学期にはやや日本文学科に寄った、1976年の朝日新聞の文芸時評、担当は大岡信ですが、これをテーマにします。この年は村上龍がデビューした年で、文学史上の転換点でもあり、文芸時評は全員読まなければいけないけれども、新聞紙面全体を対象にして何を発表するか決めなさいと指示します。これで言表生の選択の幅も広がるわけです。

各期400字詰め原稿用紙10枚以上のレポートを課し、テーマが多様になりますので、４年時には春学期に卒論の構想発表、秋学期に中間発表、夏休みの課題は卒論の一部または全部を書いて提出せよということで指導いたしました。添削等は同じです。

発表要旨のところに書きましたけれども、２年間通した指導になりますので、自ら問題を発見し、ふさわしい方法でそれを解明して他人にも分かるように資料に基づいた発表と文章化ができる能力を養成すること、これを必須の目標としています。さらに卒論を完成することで、オーバーな言い方をすれば、何かをやり遂げたという達成感に基づいて生きていく自信をもってもらう、これも目標だと考えております。

そこで培った興味・関心によって自らの将来を開く。それにつながれば一番成功だというわけです。国文学科時代の成功例といたしましては前から７人目ＳＫさん。「痴人の愛」と「石にひしがれた雑草」、谷崎と有島のテクストを比較して作中の女性の描かれ方を研究しました。この学生の卒論は予想よりはるかに面白くて「何とか物書きになりたい」と相談されましたので、「着想が面白いから何が何でも書くことにかかわる仕事を続けろ」とアドバイスしました。そうしたら、途中は省きますが、ついこの間メールが入りまして、「電撃小説大賞に最終選考まで残った」と。電撃小説大賞というのは有川浩がデビューした賞です。その大賞に最後まで残ったということで、上手くゆけば希望通りに物書きになれそうです。

終わりから４人目、ＭＹ君は比較文学の研究を進めて、名大で博士の学位を取得して、来年度から日本学術振興会の研究員として中京大学に帰ってきます。

２学科体制になってからの成功例としては、終わりから２人目ＹＹ君。彼にはライトノベル研究というテーマに対し（おそらく日本で）初めての学位を出しました。ここでの実

践の苦労話は裏面の新聞記事にあります。

この年の卒論テーマ一覧でわかるように、大変多様になっています。こうなって何が難しいかといいますと、我々が訓練を受けてきたテーマや方法では対応できなくなっているということです。私がやっていることは、要するに学生以上に自分が面白がって見せる、学生にテーマを示されたら、意地でもそれを読み上げて「おまえらよりも俺のほうが面白く読めるんだ」とやって見せる。これが指導上の一番のポイントではないかと思っております。

詳細な具体例についてお話ができませんでした。それについては質疑応答のところでお尋ねいただければと思います。

失礼しました。

白井：

経済学部の白井です。よろしくお願いします。

皆様方の学部とだいぶゼミも違うような感じがいたします。参考になるかどうかは分かりませんけれども、まず経済学部は人数が多いということです。

今選択にしておりますけど、８割方はゼミを選択しております。教員が 19 人おります。平均は 15 ～ 20 人、多いゼミで 30 人を超えるゼミもありますし、１～２名というゼミもございます。

ゼミを選択する学生もさまざまでございまして、勉強したい、あるいは同期の友だちをつくりたい、一緒に来たい、それだけで来る学生もおりますし、最終的に卒論を書くんだよということを全然理解していなくて入ってきて、それにインセンティブを与え、それをどういうふうに指導していくかということに非常に苦労しているわけです。

経済学部ではゼミは１年時から４年時まで全部あります。

必修は１年時の「入門ゼミ」です。２年時秋から３年時継続して３年時は通年、４年時も通年ということで通常のゼミは２年半になります。

１年時のゼミは全員必修でございまして、名簿順に割って、どういうことをやっているかというと、導入教育です。情報処理の扱い方とか図書館、あるいはさまざまな単位の取り方、そういったことまで指導しております。

これをゼミと言うかは分かりませんけど、その中でゼミとはこういうものですよと。

本をみんなで読み合って、そして報告し合って質問し合って進めていく。そういうものを与えるということになっております。

専門ゼミは２年の秋から始まっております。２年・３年・４年となって、これが中心になっておりますけど、そこで若い人がどういうふうにやったらいいのかというのを面白く工夫しまして、今年度より新しく就職活動で困っているようですので、エントリーシートを配って模擬採用試験みたいなことでゼミを選択してもらおうというかたちで、それを導入してやっております。

これで一番困ったことは、今までは教員側が応募した者からいいものを取る、あるいは、

自分たちで決定できてきたわけですけれども、内定を出してもどれだけ来るかわかりません。すぐ内定をもらう学生は、その中で一番いいゼミを選択するわけですので、実際に私にはどのぐらい来るのか分かりませんので、ちょっと出し過ぎて今回は30名近いゼミになってしまったんですけど、そういった学生と、こちらのやり取りでゼミが決まってしまうというのは、なかなか面白くもあり、ちょっと難しいところがあります。そういうゼミ生を対象にしなければいけないということです。

だから、ゼミ生はゼミを選択するのに就職が有利かどうかという判断があるようなんですけど、こちらとしては全く関係ないので、各ゼミもそうでしょうけど、そのへんのギャップがあります。

たとえば私は財政をやっているんですけど、公務員を志願する者には財政というのは必修、その程度にしかやれないのです。本当にそのことを指導してやるというゼミにはなりませんので、ふざけた授業しかできないということです。

やり方は、皆さんがやっているように本を選んで皆で読み合って、そして徐々に経済学がどういうものであるかというのを自分たちで研究しながら学んでいくという理想像を描いておりますけれども、なかなかそういうふうには持っていけないところもあります。

最終的に卒業論文というかたちで仕上げてもらいたいということで、それは初めのうちから言っています。

A4用紙30枚というのは結構つらいものがあるようですけど、４年生になると就職活動やいろいろな経験を通じて、こんな面白いことがあったということで、さまざまな本を読みながら自分なりの問題意識をもって、やっと４年生の就職試験が終わった秋ぐらいから本格的に一生懸命やっております。

成果物は一応こちらで保管しておりますけれども、その前に全員で報告会をして２年生・３年生に報告しながら、自分がこんなことをやっていたということをいつもやっております。

いろいろ問題点がありますけど、学生に目的意識がないですね。本当に研究がやりたいという、自分のやりたいものがどういうものであるか分からない。

それから、質問の方法、４年生ぐらいになるとうるさいぐらいになりますけれども、それをどういうふうにうまく運営していくかというのはなかなか難しいものがあると思います。

20人30人、特に今回30人以上になりそうなんですけれども、ゼミ室というものがないわけです。そういったことで非常に教える側もやるほうも不便を感じております。

センタービルのところに行ったり、４号館でやったり、工夫などはしていますけど、機器・備品・机、さまざまな面でゼミという運営ができないようなことになっております。

あとはゼミというのは自分も経験したように、卒業してからも非常に重要な友だち関係とか、さまざまなものがあります。だから、ぜひ大事にしてほしいところなんですけれども、そこまでいかないですね。

うまくいい学生たちが入ってくれば、それは一生を通じていいゼミになっていく。それは経験上分かっているんですけど、どういった学生が来るかというのは運次第なので、そういうところがなかなか難しいところです。

難しいところばかりで報告になりませんけれども、これで終わりたいと思います。

北川学長：

突然の割り込みで申し訳ありませんが、私も体育学部で30年教員をやっておりますので、１つ２つお話ししたいと思います。

体育学部は年度によってゼミを何年次にやる、卒論を何年次にやると、いろいろ試行錯誤をしてきました。一番重みがあったときは２年次・３年次がゼミで４年次が卒論の時でした。今では、この10年以上は、確か３年次がゼミで４年次が卒論で落ち着いていますが、いずれも選択のはずです。なかなかゼミや卒論をやるということは時間がかかりますので、そのようなことになっているかと思います。

もう１つは私の体験です。私は運動・スポーツ生理学を２年次で教えておりました。３年次からがゼミでしたが、ゼミではほとんどの時間が実験です。２年次の講義のテストではほとんど満点で、Ｓを取ったゼミ生が、「先生、実験をして初めて講義の内容がやっと腑に落ちた」と言ったのです。目からうろこ、の思いがしました。そういう意味合いで、私の分野では、ゼミとか卒論というのは、内容を理解する上で非常に重要だと思っております。

司会：

ありがとうございました。

もう１人、安村先生が発表される予定でしたが、急な公務で出張に行っておられます。レジュメだけは用意していただいていますので、後ほどご覧ください。

いろいろと質問もあろうかと思いますけれども、５分ほど休憩をいただいて、45分から後半を始めさせてください。その間に皆さんにお配りしておいたアンケートを回収させていただきますので、ご協力よろしくお願いいたします。

「質疑応答」へ

司会：

質疑応答に移らせていただきます。

経験交流会のアンケートでは、「経験交流会を通じて知りたいこと」と、「パネリストの先生方にお聞きしたいこと」の２つを尋ねています。

まず一番目、経験交流会を通じて知りたいことについてご質問ください。

ニーナ：

国際教養学部のニーナです。

私は、ゼミで大きなテーマを扱いながら、学生の個人指導をしています。ゼミ生の人数が少ないこともあって、卒論テーマで何をするか、現時点でどこまで進んだかといった個

人指導をもとにした発表と、普通にゼミで扱っているテーマに関する指導の間で、今はバランスがうまく取れています。

でも、ゼミ生が10人以上になると、ゼミで扱っている広いテーマを指導しながら学生の個人指導をするのは難しくて、どちらかにウエートが偏ってしまうのではないかと思います。例えば、完全にゼミは個人指導だけにしているとか、ゼミではレポートを受け取っておいてあとで個別に指導をしているとか、どういう工夫をして指導のバランスを取られているのかを教えてください。

白井：

私のところは多いゼミなのですけれども、２年生・３年生は共通テキストで勉強します。大体１回のテーマを１回の１時間半で報告できるのは４人が限度だと思うのです。

そして、30分ないし１時間ぐらい４人で報告、その後30分で議論をする。

そうするとゼミ生が多い場合、１カ月に１回は当たらず、半期で１～２回当たるかという、非常に少ない機会なので、学生は「ラッキー」と喜んでおります。

４年生になりますと個人テーマ、あるいはグループテーマでやっておりますので、義務付けまして「報告しなければ卒論は出させないよ」というかたちでやっておりますので、始めから割り振ってこぞってやるようになっております。

多いときは本当に報告機会が少ないというのがネックになっております。

酒井：

私のゼミは、共通のテーマを与え、学生はその中からどれかを選ぶ、というやり方が基本です。短編小説であれば、明治・大正・昭和の各時代で２つか３つずつ示して、その中から各自が選んでくる。

18名という人数の上限ができましたので、今は各時間に２人ずつ発表を回せるのですが、最大で29人のときがありました。これでは回せないので、３人一組でグループをつくり、作者について調べる、研究史を調べる、それに基づいて読みをつくるという役割分担にしました。本来ならば１人４回の発表を課したいところを３回にしてすべての役割を体験してもらい、全体の調整を取ったわけです。

個別指導は、私の場合は基本的に添削したレポートを返して、質問があればいらっしゃいというキャッチボールのスタイルです。

長滝：

うちも18名で切っていますので多いほうかなと思うのですけれども、多い場合には基礎的なことを学ばせるには楽だと思うのです。

僕がよくやったのは、基本的なテキストを選んで、パートごとに担当者を決め、それぞれで、ひとつのパートについて要約・質問、それに対するコメントを出してもらい、それを議論のネタにすることでした。そのやり方は、基本的にお互いに論文を読み合うときにも踏襲し、互いのことを議論し合っていい効果が上がったと思います。

多くて一番困るのは最後の詰めのところで、30枚以上の論文を一人一人読んで僕は添削

をしなくてはならないわけですが、そこはもう力業になります。

少ないとどういうデメリットがあるかというと、グループ学習があまりできなくなることです。そのときには、やはり個別的な発表頻度がぐっと上がって、たぶんゼミ生にやる気があれば、少なければ少ないほどいいのではないかなとは思います。

金：

あまり同じようなことを繰り返す必要はないと思いますが、卒業論文は少人数がはるかにいいと思います。

ゼミそのものは適正人数を10と定めるか15と考えるか人それぞれですけれども、卒論指導という意味で少人数は誇りに思っていただく必要があると思います。

ゼミ運営において、人数が多い部分の自主性を考える上では、私のゼミは多い場合は17人ぐらいのときがあるわけです。学生の自発的なテーマ設定によって２～３にサブグループ化させて、とにもかくにも議論させて、グループごとでレポートを書かせるのです。

ということで、１つのゼミの中には関連した３つぐらいのサブグループが機能するプロジェクト型のミッションが常に動いているということを、参考になるかどうか分かりませんがお伝えします。

栂：

今の国際教養学部の４年でどういうふうに卒論をやっているかということをちょっとお話ししますと、11人のゼミ生のうち２人が私費留学をして１年延ばす、そうすると９人残っています。

春学期は大体就職活動で、出席するのはその２分の１か３分の１ぐらいになります。

授業の度に書いてきてもらう原稿を添削しているということをずっとやりました。

今は９人就職活動が終わって揃ってきましたので、たとえば今週はどこまでやったのかということをチェックして１人ずつノートに書かせます。

それを私がiPadの写真で撮っておいて、翌週に「先週はこういうことを言っていたけれども半分しか実現しなかったよね」と、幼稚園のようなことをやって何とか12月に書けるようにと、そういう苦労をしています。写真は学生への圧力ではなく、教員の覚えです。

風間：

全体のテーマは、私の場合は「ジェンダーとセクシュアリティ」というテーマで募集をしているので、まずそれについての基本的な理解をつくるための文献をたとえば最初（春学期の前半）に読み、後はそれに沿ったテーマ選択をしてもらうというかたちでやっています。

司会：

ありがとうございました。

では次に、パネリストの先生方にお聞きしたいことのうちで、全員の先生に対する質問をお願いします。

中村：

国際教養学部の中村です。

これまで基礎ゼミを担当したことはあるのですが、卒論までつなげていくゼミを担当するのは初めての経験です。先ほど酒井先生もおっしゃったのですが、自分の学生時代のゼミの方法が必ずしも通用しない、その中で今ゼミを行っているわけです。

思想文化系ということもありまして、テーマの一定の縛りはあるようでありません。学生によってずいぶんとテーマがばらばらなのです。そうしますと、テーマが異なる学生を対象にして、同時に教室全体の学生を対象にして授業を行わないといけない。そういうかたちで授業を行いますと、ある学生が発表しても別の学生にとってみると全く関心のないテーマであるということもあるわけで、要するに学生それぞれ自分のテーマには関心があるのでしょうけれども、ほかの学生のテーマには必ずしも関心がない。

ゼミ全体の雰囲気というか、一緒にやっていくのだという高まり、それをつくり上げるにはどうしたらいいのかを今一番苦労しています。そのあたり何かヒントでもあればお願いしたいと思います。

金：

沈黙よりは誰かが発言したほうがいいと思いますので、簡単に私なりの方法をお伝えします。

これはほかの先生方も同じだと思いますけれども、良くも悪くも私が学生時代や大学院生時代にゼミで訓練を受けた手法を踏襲するパターンが多かれあると思います。

私が訓練を受けたゼミというのは、基本的に多様なテーマの学生あるいは院生が論文を書いていたわけですが、先生が特に知識が豊富だったということもあるかもしれませんが、一通りコメントを短くはするのですけれども、次にやはりピア同士・ゼミ生同士のコメントが一番重要になってくるということで、私だったらこういう書き方をする、あるいはこのほうが分かりやすい、いわゆるお互いの指導というかたちで議論を盛り上げます。

関心のあるテーマ、関心のないテーマというのはあまり意味がない場合が多くて、むしろフォーマット、論文を書く手法においては人の問題はよく見えて自分の問題がそこで初めて分かってくるということですし、同じような試行錯誤を学生たちは繰り返していますので、学生たちがコメントをするという時間を増やすことがもしかしたら参考になるかもしれません。

酒井：

卒論の具体的なテーマを挙げているのは私だけなのですが、これがばらばらという印象に見えるか結構まとまっているという印象に見えるか。

国文学科の時代は良くも悪くも小説を読んで何とかかんとか論じている、というぐらいのまとまりはあるわけです。

ところが、言語表現学科の卒論になりますと、たとえば「山口誓子の校歌を歩く」というテーマの学生がいますが、これは言ってみるとルポルタージュなのです。一方、「一人ボイスドラマをつくる」というのは音声を主にした創作なのです。いわゆる卒論だけでなく、

これぐらいの散らばりはあります。

私が工夫していることは、発表の順番を決めるときにテーマまで言わせる。「私はこういうテーマで、この日に発表させてください」というふうに、自己申告で発表日程を決めます。どういうテーマで発表するか、そこで一応全員に告知されるわけです。

次に、翌週の発表者には、みんなに予習してきてほしい課題を必ず言わせます。「山口誓子の校歌を歩く」というテーマであれば、伊賀上野高校にこういう校歌があるので、伊賀上野へもし行けるのであれば行ってきてくださいとか、そういうイメージです。

当日の発表のときは、最初に私が司会をするのですけれども、全員にメモ用紙を用意させて、発表が終わったところで５分ぐらいの時間を取って、誤字や脱字その他の訂正を、私が当人に向けてということを言いながら、実は全員に聞こえるようにやります。発表者は２人いますので、それが終わったら当日の発表者ではないほうの学生に、質疑応答の司会をやらせます。

そうすると、意見が出ないと司会者が自分で何か言わないといけなくなるので、とにかく必死になって当てます。それで話が出てきます。そうこうしているうちにメモ用紙に書く手が止まります。手が止まるということはコメントを書き終えたわけですから、当てれば必ず何か言えるはずです。司会役は、そういう学生をねらって言わせる。

議論していく中でつながりができてくる場合もありますし、できてこなければ「そう言えば、そういう話をするのだったら誰々君がこういうテーマだったけれども、そういう人に当てたらどうかな、司会者さん」というようなやり方をして議論を回します。

なかなかゼミの議論が活性化しなくて私も困っていたのですけれども、参考文献に挙げました「FDニュース」の第一号で教科教育の授業を見せていただいて、指導教員は90分一言もしゃべらないで学生が授業を全部自分たちで切り盛りしているのに驚き、そのやり方を盗んでコメントカードと学生相互の司会というやり方を始めました。

これこれの予習をしてきてくださいというふうに言わせるのは、発表する当人にとっても翌週の準備になりますので、これはある程度有効かなというのも含めて、以上２つが工夫です。

長滝：

僕は中村先生と同じ思想文化系ですが、テーマは種々雑多でばらばらです。ただ、僕がいつも注意しているのは、テーマの内容に興味が持てなくてもアーギュメントに興味を持つようにさせるということです。先ほどの発表でも言いましたが、そのために、テキストを読むのと同じ要領で、他のゼミ生の書いた文章に対して疑問点とかコメントなどを出させるようにしています。

そうすると、どの学生もテーマにかかわらず、他人の書いたことに興味をもち、それを評価しながら、ウィーク・ポイントも見つけてこようとします。他人の書いたものをしっかりと読んでいるかどうかで平常点をつけました。

こんなやりかたをすると、僕はほとんど言うことがなくなります。注の形式だとか誤字

や脱字程度しか言うことがなくなるぐらいいろいろ出てくるので、あまりご心配される必要はないかと思います。

白井：

ゼミで２年生・３年生は、経済学のスタンダードと言われる理論、ミクロ経済学とマクロ経済学、私は経済学を卒業する時点で絶対に知ってほしい内容だと思って、共通テキストというかたちで選んでいるのです。

どういう教科書を選んでもその内容と学生のレベルというのはかなりギャップがあって、ディスカッションしなさいというのが無理な段階で質問でもばらばらで、かえって共通のほうが近道なのです。

もう１つは、自分たちが読んできた本をそれぞれ２人ぐらいずつ発表させます。それはともかくむちゃくちゃ・ばらばらな新書版などを持ってくるのです。

そういったほうがわあわあと興味が沸いて、ばらばらなのだけれども質疑がいっぱい出てくるわけでディスカッションにもなる、その延長が卒論なので、それがもっと面白くなるということで、身近な音楽とかスマートフォンとかそういったかたちでこの純粋理論とは全然関係ないような、本当に経済の井戸端会議みたいなものをいろいろ集めてきてやっていますので、大変楽しそうにやってもらっています。

だから、共通でないほうが面白いというような感じがいたします。

司会：

ほかに質問はありませんか。

浅野：

今の質問に関連した質問をさせていただきます。国際教養学部の浅野です。

国際教養学部のゼミは、９つあるうち７つのゼミが語学系です。語学のゼミの場合、１年生のときにすでに語学を取っていて語学の先生と面識がありますし、その語学を中心としたゼミを始めるにあたっても、講義とゼミとのギャップが割りと少ないと思います。それに対して、思想、歴史、国際社会のゼミというのはほとんど関連の授業を取ったこともないのにいきなりゼミに入ってくるというのがありまして、要するに講義を取った学生もいれば取っていない学生もいて、そのギャップがすごく激しいのです。テクニカルワードみたいな、講義を受けていれば説明は簡単に済んでしまうことを、もう一度説明しなければならない状況になってしまうのです。

さっき白井先生がマクロ経済学の教科書を読んでいる学生がいるという話をしていました。共通のベースとなるようなフレームワーク、それは酒井先生の文学部にもあてはまると思うのです。論文作成をするにも、これぐらいのことは知らないとやっぱり議論ができないという、そういう基本がたぶんあると思うのです。それが共有されていない段階でゼミが始まってしまって、そのゼミも１週間にたった１回しかないので、ゼミ開始後しばらくは何もできないという状況になってしまいます。

そういう講義とゼミのギャップ、講義とゼミとの連携の不具合から生じる問題というの

は、文学部や経済学部では起きないのでしょうか。それをお２人の先生を中心にうかがえればありがたいです。

酒井：

学部の体制ということでお答えします。

文学部は今、日本文学科と言語表現学科の２学科体制になっていますが、両学科とも１年次の必修科目を受けている間に、専任教員の顔が見られるようなカリキュラムにしてあります。卒論指導は専任教員が担当しますので、特殊な事情がない限り１年と２年の間に卒論指導を受けることになる教員の授業は聞いているというのが前提です。

言語表現学科の学生が日本文学科の卒論演習のゼミナールを取ってもよく、逆も同じくＯＫですので、２年次に自分の所属学科でない学科の１年次の必修科目を選択科目として履修できるというシステムになっています。

さらに、これは去年から始めたのですが、２年生の秋学期に、日本文学科では「日本語日本文学演習」、言語表現学科では「専門入門演習」という科目名で、それぞれの専任教員がゼミと同じように最大 18 人という上限の人数で、ゼミの基礎訓練を全部やっておこう、つまり、レジュメのような発表資料に基づいて自分の意見を人に分かりやすく伝え、その発表に基づいて質疑応答・討論する、そういった演習授業を受けるための基礎訓練をやるようにしました。その結果、ゼミ活動がやりやすくなったと感じています。

ですから、個々の教員の努力というよりは、むしろ、学部のカリキュラムの中で工夫されるのが有効なのではないかなと思います。

そういうわけで、全然私の授業を取ったことがない学生が、３年以降の私のゼミに入ってくるというケースは文学部ではあり得ません。

白井：

経済学部のカリキュラムでは、ミクロ経済学・マクロ経済学というのが中心にあって、それから財政とか国際経済とかというふうに発展していく、そういうカリキュラム体系、あるいは学問体系になっているのです。

経済学部では、１年生のときに入門マクロ・入門ミクロという意味で本当に基礎的なものを教えて、２年生・３年生で少し発展的なマクロ経済学・ミクロ経済学、さらに３～４年でそれぞれの分野の経済学を教えているという体系になっているわけです。

学生は入門ミクロの１年生のときにちょっと数式を使ったり何かしているので嫌気がさしてしまって、さあ本来の３年生のマクロ経済学・ミクロ経済学を選択しないという、そういう学生が多くなってきてしまうのです。

ゼミでもそういう物を使って議論したいという思いはあるのですけれども、ほとんど理解できないままです。

そうすると、卒論などは何を選んでくるかというと少子化とかそれから財政破綻とかTPP とか、そういったことで扱うのにミクロ経済とかマクロ経済が本当はあるのですけれども、言葉の上では出てこないものですから、そちらのほうに飛び付いてしまって、経済

的な内容ではなくて本当にいろいろマスコミでやっているような話題で議論が進んでいくという、ちょっと大学の議論としてもう少し突っ込んでほしいなと思うところで残念なのですが、そちらのほうが盛り上がるものですから、それでよしとするというふうに思っていてそういうギャップはいつも感じております。

浅野：

そうすると、カルチャーセンターみたいな感じで、ゼミの発表や討論が講義とは何の関係もないものになってしまいますね。生活感覚での議論になってしまいませんか。

白井：

そうです、そうそう、そうなんですよ。

それで卒業できてしまうのでちょっとおかしいのですけれども、やっぱり経済学というのはスタンダードというのがしっかりしていますので、それを学んで卒業できるような、そういうレベルになると本当の経済学ができるのではないかと思って、まだまだ道遠しというふうな感じがいつもしております。

長滝：

一言だけ。やっぱり個人差がありまして、できる子は学部の展開科目等でやっている授業をしっかりベースにしています。つまり、講義科目を通して学んだいろいろなことからヒントをえて卒論に結びつけてくるので、哲学的にきちんとした概念を使います。ただ、全員がそういうふうになるのはかなり難しいと思います。

栂：

浅野さんの質問から、ちょっと私は先ほど言い残したことがあります。

語学系が6で講義系のものが3で総数で9、それが27人の教員でゼミが回っています。

そうすると、たとえば自分の科目のことで申し訳ないのですけれども、英語の教員は13～14名いまして、もしみんながゼミを希望するとなかなか回ってこないというような状態があるわけです。

一方、3人とか2人で回しているゼミの先生方はもう卒業生を出したと思ったらまた回ってきて、「どうしよう、おいおい」という世界です。

そこのアンバランスをこれからどうしていくかということを、我々は学部の問題として考えていかないといけないのだと思います。

司会：

他に質問がないようでしたら、パネリストの先生方にお聞きしたいことのうちで、個々の先生に対する質問をお願いします。

ニーナ：

特に酒井先生にお伺いします。

学生に卒論テーマを決めさせるときに、学生が調べたいことをどこまで尊重するのか、「ゼミで扱っているテーマのうちのこれに絞ったらどうか」というアドバイスをどこから教員がすべきかを決めるのがとても難しいです。先生はそのバランスをどのようにとってい

ますか。

酒井：

実際の発表や卒論テーマそのものを聞いてみないと具体的なお答えはできませんので、私の経験をお話しします。

失敗例を話してほしいというご要望がありましたが、失敗例のほうが長くなるので先ほどは割愛いたしました。そこからお話しします。

たとえば今、ライトノベルに興味を持つ学生が多いのですが、さて皆さんどういうものかがお分かりになりますでしょうか。最初の年、私にも何が何やら分からなかった。何が何やら分からないと、発表を聞いても交通整理すらできません。詳しくは裏面を参照していただくとして、完全に手探りです。これでは、有効な指導はできません。

次に、ここに挙がっていないケースで私が失敗したのが、テーマを絞ってというか具体的にしてあげすぎて書けなくなってしまった例。それは漫画をテーマにした卒論です。漫画研究は今、いろいろなところで行われているのですが、その多くが漫画を読んで物語で論じようとする。たとえば『巨人の星』と『あしたのジョー』を題材にして、「高度経済成長の時代に相応しい右肩上がりの努力物語である」という論を展開したとします。これはこれで分かりやすいのですが、私はこれにだめを出します。なぜかというと、「漫画には絵もある、なぜ物語だけで話をするのか。物語だけで話をして済むのだったら小説を使いなさい」というわけです。ところが、そうアドバイスしたところ、「絵の分析の仕方が分かりません」と言って当該学生の卒論は破産してしまいました。

実際には漫画研究において、絵柄の分析が入ってきたのは割りと最近なのです。

皆さんのお読みになりやすい例で言えば、夏目房之介さんの『手塚治虫はどこにいる』という本に、「手首を返さないと描けないこの曲線こそが手塚治虫だ」という指摘がありますけれども、これなど、実作者ならではの絵柄の分析です。しかし、先ほどお話ししたような経験をして、研究上今求められている方法に絞り込むことが必ずしも指導上の正解ではないのだな、と実感しました。

そこで私が気をつけているのは、以下のような指導上の手順です。最初の共通課題で発表してもらうところで話を聞いていて、まず、大体どれぐらいの日本語運用能力のある学生なのか、目星をつけます。次に、秋学期の発表で、文芸時評や新聞紙面から、どういう分野を選んできてどういう話をするか、興味のあり様に見当をつけます。４年春学期の構想発表で、興味のあり様とその展開から大体どんな方向に持って行ったらいいのか見当をつけ、「今日の話はこういう感じだったけれども、こういう見方もある。そんな別方向にも関心はあるか」みたいな振り方をします。全体のイメージを開くわけですね。

最終的にレジュメにも書きましたけれども、とにかく学生が知的好奇心を高めて学習意欲を維持・展開できるようなアドバイスをしてあげれば、400 字詰め原稿紙 50 枚以上という量の中で書ける大体のところに着地して、卒業論文をまとめて提出してくる、というのが経験から得た結論です。

自分が学生それぞれのテーマに応じて一定の形式を持ち、その中に縛ってしまうと、かえって失敗することが多いのかなと私の経験では感じます。

興味関心があるところだと、学生はむしろベラボウに広げてきますので、そこで薄いところを指摘すると全体が濃くまとまってくる。イメージの議論で申し訳ありませんが、こんなお答えでよろしいでしょうか。

司会：

では、ほかに質問ありませんか。

浅野：

合宿についてうかがいたいのですけれども。

学生たちの自主性が引き出されれば引き出されるほど、学生も面白くなって熱意を持って取り組むようになります。しかし、そのためには考える道具として言葉を慎重に選んで使わせるより、学術的な概念とか理論とかを無視してカルチャーセンター的にやったほうが手っ取り早いともいえると思うのです。しかし、多少は共通の議論の土台も必要で、思う／思わない式の次元での議論はむなしくなると思うのです。

その矛盾の中で、合宿は学生のやる気を引き出しつつ、共通の議論の土台としての概念やモノの見方を集中的に勉強する機会としていいかなと私などは思うのですけれども、他学部の例では、合宿というものをどういうふうに正規の授業の中に組み込んでいらっしゃるのか、それについてうかがえればありがたいと思います。

白井：

ゼミ合宿ということですね。

商学部時代から講義をして、経済学を取って20年になりまして計30年ぐらいもう勤めているのですけれども、商学部時代はほとんど毎年合宿に出かけておりました。経済も始めの10年ぐらいは合宿に出かけておりまして旅行もよくやったのですけれども、そのうち学生のほうが面倒くさいというのか、みんなで集まってスケジュールを立てて行くというのに嫌がりだしまして、組むほうもなかなか難しいというような、そういう状況になりました。

若いころは無理やり連れて行ったものでした。だいぶ年を取ってくると学生に迎合するようになってきていけないと思うのですけれども、若い先生方はやっているかもしれません。

確かに効果はあるのです。その３日間、あるいは２日間で一応ゼミ報告させて、そしてレクリエーションをさせて、そしてコンパをやる、そういう一連の中で帰ってくるとまた仲良くなって、そしてゼミも一生懸命やるというふうに。私もやりたいのですけれども、なかなかこのごろの学生のほうが面倒くさがってやってくれないという寂しい面もありますということです。

酒井：

私の場合は、率直に申し上げてあまり機能していません。

国文学科の時代は作家ゆかりの土地を訪ねる文学踏査ができたのでやりやすかったのですが、日本文学科・言語表現学科の体制になってからは両学科に共通する探訪地がなかなか見つからないです。

記念館や文学館などの情報は流しますが、結局、３年生は合宿なし、４年生のゼミ合宿として毎年卒論が終わった後、下宿生も含めて割と学生が都合のつくときにみんなで温泉旅行に行って「お疲れ様」会をするというのが実状です。

栂：

まだ若かったころはそういうことをしていました。

それは国際英語学部がまだ文学部だった時代、心理と英文と国文の３つだった時代というのがありましたけれども、そのときに非常に積極的な学生がいて一生懸命やっていました。

彼らの動機の中で、男女であれ同性どうしであれ、友人をつくりたいという強烈な意思があった。そういう学生が何人かいたときにはそれに引かれて合宿というものが成り立つのだなというふうにちょっと学習したところがあります。

彼らから言ってこない限り、こちらから「鳥羽へ行こうね」と言っても、これは何か失敗するような気がします。

司会：

他に質問がないようでしたら、最後に回収したアンケートからの質問です。

「４年次の終わりに、文集とか報告会とか、ゼミ・卒論の総括を何らかのかたちで出しておられれば、それについてお伺いしたいです。」

これについて、パネリストの先生方、お答えください。

酒井：

今まで申し上げなかったことですが、文学部では卒業論文の口頭試問はノルマになっていないのです。

私が助手をしていました前任校の早稲田大学では、口頭試問がありました。そこで、ここに赴任したときに、私だけ「僕のゼミの卒業論文の指導は口頭試問をもって終わりとする」としました。

その後、口頭試問をなさる先生が増えて、今でもノルマにはなっていませんが、実態として半分ぐらいの先生が口頭試問をなさっています。

多いときで20何人いますけれども、大体１人30分かけます。

４年の春学期のレポートは卒論にどう変わってゆくか分かりませんので、あまり丁寧に添削はしません。しかし、卒業論文は、よしんばプロの論文書きになったとしても、今後これほど長い文章を書いて好意的な眼差しだけで読んでもらえるチャンスはないのだから、「間違いなく僕自身があなたの書いた物を丁寧に読んだよ」という証拠として丁寧に添削します。その上で口頭試問をして、本人に返します。これが私のゼミでは１つのイベントです。

１対１でやるわけですけれども、場合によってはその日の５人なら５人が、そのメンバー

でコンパをやるから先生来てくださいという展開もありました。

今、研究棟に何枚かポスターが出ていますが、文学部には学部生が自主的に行っている研究会がありまして、毎年、合同で研究発表会を開催しています。今年は今週の土曜日で11月5日にあります。私が着任してから始まりましてもう20回以上、それをモデルにして「何ゼミか合同で卒論の発表会を企画したい」と学生が今年初めて言ってきました。私のゼミ単独ではなくて、私のゼミ生が仕掛け人になって幾つかのゼミを誘って実現しようとしています。これがイベントとして定着し、新たな伝統になってくれればいいなと思っています。

白井：

個々のゼミは何らかのかたちでやっていると思うのですけれども、私のゼミは4年生が個々何を研究しているか、テーマはみんな経過報告的にしていて知っているとは思うのですけれども、全体的にどういうふうにまとまったかというのは、最終的には私しか知りません。

12月の最後のときに全部提出締め切りにしておきまして、1月のゼミの時間、あるいはちょっと時間を割いて発表会というのを全員に課しております。

聞く者は4年生のゼミ生だけではなくて、2年生・3年生のゼミ生もおりますので、その者どもに声をかけまして、一応パワーポイントを使って5分から10分程度で説明させます。それなりに面白味を感じているように思いますし、2年生・3年生もこういうものが卒論かというふうなことが伝わっていくような感じがしております。そういうことをやっております。

酒井：

ちょっと補わせていただきます。

あまり大きな声では言えないので、なんならピーしていただいてもいいのですが、私が口頭試問をする理由の裏話です。

私は卒業論文に欠点を付ける場合があります。具体的に言うと、最近ではコピペ、かつてであると引用のルールに従わない論文、こういったものについては欠点を付ける。

欠点を付けるに際して、これこれの理由でこのままでは「可」を付けられないと言うチャンスが最終的な成績報告の前にありませんと、文学部は卒業論文が必修ですから、自動的に卒業できなくなってしまいます。

こういう話は都市伝説のように伝わっていきますので、甘えに流れないようにするためと、自分自身が指導上の良心を曲げないようにするために、今までに口頭試問の段階で何本か、「これは欠点であるからいついつまでにこれこれの物を再提出しなさい」と指導してきました。これが、ぎりぎり定期試験期間中に全員の口頭試問を終えておく理由です。

私は全ゼミ生を前に「俺は落とすから」と宣言してはいませんけれども、先輩たちからボソボソと「あの先生は授業中はとても優しいかもしれないけれど、口頭試問のときに突っ返された先輩がいるのだ」と伝わっているようです。厳しいからという理由で勉強させる

のは好きではないのですけれども、「もう就職も決まっているわけだし何とかしてくれるだろう」型の甘えを絶対に許したくないので、そのためにも口頭試問をやっています。

これはあまり言いたくないことでしたけれども、口頭試問をやっているのがプラス方向の理由だけではないということをちょっと付け足しておきます。以上です。

司会：

他学部を担当されている先生方からは、何かご発言ありませんか。

金：

そのような口頭試問みたいなものはありませんが、卒業論文の論文集というものをつくって国際英語学部はLS WINGという国際教養でいうラウンジみたいなところがありまして、そこに配置しておきます。

３年生また４年生に、先輩たちの論文をそれぞれ手に取ってランキング付けをさせるという仕組みで、いわゆる自分にとってロールモデルとなりそうな、あるいは興味のある、または学生同士で先輩がどの論文がよく書けているのかということを観察させるという仕掛けをまずつくらせて、学生目線からよくできた論文を１つのモデルとして選ばせるという工夫はしております。

栂：

酒井さんが面白い裏話をしてくださったので、私も。

昨年までは、国際英語学部の英米文化学科の４年生のゼミをずっとやっていました。つまり卒論を書くだけです。

そうすると、私は兼担教員ですから、３年生のときから学生は私を知らないわけで、正確な数を覚えていないのですけれども、４年のゼミが10ぐらいあったとすると、私は11人目の教員であります。

そうすると、こういう言い方は悪いのですけれども、先生を選ぶときに第１志望の学生が少なくて第２・第３の学生が来ます。

言葉は悪いですけれども、あちらの学部の先生は学生を、これは可能性の話ですが、囲い込むことができる、私はよそ者だからそれができないということで、４年生と一本勝負をしなければならなかった。

そういう状況の中で、何とか書かせるかたちでやるので、最後の口頭試問その他はしなかったという記憶があります。

それから、世代的には私は５歳ぐらい酒井さんより上ですけれども、我々よりもうちょっと上の世代が院生のころは、当時の先生は絶対に学生の指導はしなかった。

私は都立大学という今はなくなった大学出身ですが、卒論というのはいきなり書いて最後に口頭試問があって、それで先生はその学生をいい意味で人格否定するわけです。「おまえは文学は分からないからやめろ」とか「大学院に行くな」とか、よく考えるとそういう意味にとれること。そういうことを言われたところでした。

そして、私立大学に就職してみて卒論でも教育というものをやらないといけないと肌で

感じ、非常にこのギャップがすごいなというので無手勝流で教えているという状態です。

風間：

私も国際英語学部で昨年指導したときには、卒論を冊子にして最後に学生に渡したのですけれども、卒論自体を読むのが教員だけというのはあまりにも学生にとってモチベーションが下がるのではないかというのと、できたらほかのゼミ生にも読んでもらいたい。LS WINGに置いてもらって後輩にも読んでもらいたいということで冊子をつくりました。

ただ、作業時間が予想以上にかかったので、学生と一緒にやる等のことをしてもいいのかなと思います。

あとできたら、何らかのかたちで学生が卒論発表できるような機会を、ゼミの外でやれたらいいかなとは思っています。

そして、できるだけ外部のオーディエンスにも開くようなかたちでやれたらいいのではないかというのを感じました。

しかし、ゼミの卒論発表会に外部のオーディエンスがくるというのは、呼びかけてもなかなか難しいのかなとも思うので、国際教養学部でも、学部で卒論発表会をおこなう、いくつかのゼミで合同発表会をするなどの方法も検討したらどうでしょうか。

司会：

パネリストの先生方には前もって、「国際教養学部では、先輩がいない最初の４年生を担当しています。教員と学生がお互いに要領がつかめないこともたくさんあると思います。どうやってやる気を引き出すか、卒論を書くに当たってどう意識を変えていくか、ということも意識して、成功談だけではなくて失敗談もお話ください」とお願いしてありました。今日は、応じにくいだろう要求を聞き入れていただき、言いにくいことまで言っていただいて、大変参考になったものと思います。

これをもって閉会の挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

（終了）

2011年11月2日
第12回経験交流会

モチベーションを上げる
～国際英語学科での経験～

長岡孝
（国際教養学部）

工夫していること

①コメントカード

⇒全員が発表後に記入
⇒コメント
⇒発表後、報告者へ

良い点：討論を深める
雰囲気作り
モチベーションUP

課題：時間がかかる

②グループ分け

⇒近いテーマ同士で
⇒原稿を読み合う
⇒教員は各グループを回りコメント

良い点：2度手間の回避
発表機会増やす

課題：
グループによる違い

スケジュール：4年春学期

ルール：欠席4回まで

①文献購読A（ジェンダー論の概論）　6回
※学生が複数文献から選択　※学生：司会と記録

②図書館ガイダンス～論文・図書・記事検索　1回

③文献購読B　各自が探してきた論文を読む　6回
※要約よりも、問題提起と自分の主張を論理的に

★夏休みの課題～テーマ決定と文献リストの作成

コメント用紙

報告者（　　）

1 報告者が最も言いたかったことは何だと思いますか。
要約してください。

2 報告者の結論に質問できますか、できませんか。
その理由は？

3 その他の意見や気づいたことを書いてください。

※A5サイズ

スケジュール：4年秋学期

①卒論テーマ発表(発表10分＋討論20分)　4週

②卒論全体骨子の発表(発表20分＋討論25分)　5週

③グループに分かれての原稿読み合わせ　3週

※教員に2度提出（添削⇒返却）
※レクチャー：形式、引用、文献リスト作成

④卒論提出　12月中旬

⑤ゼミ内卒論発表会　3週

重視していること

①「対等性」
・教員もいち参加者に
⇒自由に討論できる雰囲気
・強引に誘導しない

②自主性
・テキストの選択、司会・進行を学生に

自分（たち）で決定し、ゼミを運営する
教員の役割はハード面の整備、選択肢の用意

経験交流会　　「就職と卒論のテーマ選択」　　2011年11月2日

栂　正行

（国際教養学部）

学会の停滞話、静岡市大道芸ワールドカップ（11月3日～6日）、異業種間交流

（1）なぜ、演習か？

文科系では演習こそ大学教育の核、一学年9クラスしか演習がない、英語の教員でローテーション、失敗例こそ聴く価値あり。

（2）国際英語学部英米文化学科の演習で何をしているか？

国際英語学部英米文化学科が三年生11人、英米文化学科が定員を10名と定めているため、イギリス小説18世紀から21世紀のカノン、つまり古典中の古典、とくに19世紀と20世紀の作家を選ぶ学生が多い、英語ならなんとかなるだろうと考えて、萩原朔太郎、トーイックの波、不易と流行の不易部分は、いつも大事。

（3）就職試験の面接で、卒論のテーマを聴かれたら、国際英語学部英米文化学科の学生は、なんと答えるか？

「ひとりの作家を、あるいは作品を丁寧に鑑賞し、理解することは、かならず人間理解につながる。それは就職という一見短期的なハードルを越える上で不利とも見えるが、長い目で見れば、得るところは大である」

（4）国際教養学部の4年生に同じ質問をすると。

『不思議の国のアリス』→「世界で延びるイギリス製品―ダイソン」

シェイクスピア→「イギリスの食料自給率」

（5）ふたつの学部の学生を前に、就職の面接という一石を投じたところ。（メモ）

＊国際英語学部英米文化学科の学生は、彼らなりの覚悟を決めて、英語圏の文学・文化を学んでいる。＊ただし、この覚悟には経済的事情がからんでいる。昨年度の経験交流会の講師が女性のキャリアについて講演を行った際、学生の出席者は、授業が重なったこともあり、わずか三、四名であった。これには、講師の勤務先の日本女子大学のおかれた東京、関東という環境と、中京大学がおかれた中部のそれぞれの経済事情がからんでいる。発表者が中京大学に着任した日本のバブル期には、東京では共稼ぎ、名古屋では主婦がパートにも出ていないという状況があった。それから二十数年、文学を文学として大学在学中に堪能できる学生の数が、中京大学でどのように推移していったか、あるいはいくかは、今後、注意して見て行く必要がある。＊国際教養学部の学生は、文学を好みつつも、文化ないし社会から文学へと軸足を移すことを躊躇する。＊上記の差は、募集段階ですでに決まっている可能性がある。＊であれば、一期生の就職状況を見て、募集戦略の見直しも視野に。＊国際教養学部ゼミ生の就職状況を見ると、卒論のテーマが就職を左右したようには思えない。＊就職につながる学生に共通の資質は「反応の良さ」である。教員の質問に「適切な答を出す」、教員の指摘に「修正案をすぐに出す」、クラスメートの発表に「問題点を発見する」、「的確な質問をする」、など。これはあたりまえのことで、考えてみれば、われわれが学生のころから変わっていない。OWARI

2011年11月2日　中京大学国際教養学部　経験交流会「卒論指導の概要」

国際教養学部　金　敬黙

＋キムゼミのゴール：グローバルな問題をローカルな文脈から取り組める「市民」になる。
＋ゼミのキーワード：グローバリゼーション、グローカリゼーション、社会貢献、NGO・NPO、ボランティア、市民運動・・・。

＋（兼担している）国際英語学部のゼミの特徴：3年生から4年生までの2年間。卒論必須。同一学年（ピア）によるゼミ運営など。
＋ゼミにおける卒業論文の位置づけ：学生時代の最後の仕事の一つ。そのために、他人に読んでもらいたいと思えるテーマを取り上げる。と同時に、楽しく書くことを目標とする。

＋ゼミのローカル・ルール：
　社会科学の論文を一つのモデルとして考える。学際的であることを歓迎し、特定ディシプリンにこだわる必要はない。「国際英語学部」という位置づけから、「国際」的なテーマであることを重視。20,000文字（学部は14,000文字以上）。クリティカルな視点を持つこと。机上の空論で終わらない実践学を目指すこと。

＋卒論指導における難しさ：
　問題意識がない。そのため、問い（WHY?）を作れない。自由にテーマを選べない。
　先行研究批判ができない（学術書や論文をちゃんと読んできてない）。論文のための調査や執筆に集中できる環境ではない。学術的な訓練を受けていないし、それを身につけたいと思わない。

＋どうやってやる気を引き出すか：
　基本的に私が学生時代であったころのスタイルを踏襲。学生同士のコメントが大切。
　フィールド調査やケーススタディを重視する実践的なアプローチを尊重。

＋参考になる本：
　小田博志『エスノグラフィー入門＜現場＞を質的研究する』春秋社、2010年。
　井上ひさしほか『井上ひさしと141人の仲間たちの作文教室』新潮社、2002年。

第12回経験交流会　演習科目の指導法～卒論指導を中心として～

国際教養学部国際教養学科
思想文化系ゼミ　長滝祥司

１．３年次春学期：興味関心が相対的に近いゼミ生同士で３名くらいのグループをつくり、各グループでプレゼンテーションを行う。この作業をつうじて、自分の興味関心を意識し、卒論への準備を始める――同時に、この段階で、卒論を書くことが卒業要件であるということを強く意識させる。

２．３年次春学期の終盤：卒論のテーマを決定し、「前書き」部分を提出してもらう（原稿用紙２枚程度）。その際、「本論の目的は・・・することである。」といったような、目的を示す文を組み込む等、２年次春学期のレポート作成時に指導した形式的な事柄の再確認を行う。長滝が添削し、７月末までに返却し、これをもとに書き換えた「前書き＋α」を８月10日までに提出する。

３．３年次夏休み明け：「前書き＋α」を展開し、10枚以上のレポートを提出してもらう（前書きと最初の章あたりまでを書いて、あとは全体の章立ての内容を箇条書きにしたようなもの）――この時点で、７月に受け取った「前書き」とは異なるテーマで書いてくる者も数名出た。

４．３年次秋学期前半：１時限に２名ずつ提出済みの10枚程度のレポートをもとに発表を行い、他のゼミ生全員から質問、コメントを受ける。発表者は他のゼミ生からの質問とコメントを前もって見て、それらに対する回答を準備する。発表後、長滝が添削した原稿も発表者に返却する。発表者は他のゼミ生の質問、コメント、長滝の添削をもとに、原稿をさらに発展させる。

５．３年次秋学期後半：上の発表を終えたものから順次20枚分のレポートを提出する。秋学期後半は、その20枚のレポートをもとに発表を行う（１時限に２名）。質問、コメントについては同様に行い、さらに、長滝が添削した原稿を各自に返却する。この時点で、サンプルを配布し、注の形式等の指導を行う(MLA Styleを踏襲した形式で指導する)。この時点でテーマを変えるものも出た（１名）。

６．３年次秋学期終盤：これまでの作業をもとに、30枚以上（注を含めない）の原稿を提出する（４年次春学期の直前まで）。引用文献についての規定は、①10本以上の文献から引用する（インターネットからの資料はこれに含めない）、②翻訳文献は原典を参照する、③翻訳のない文献をひとつ以上使用する、とした。この時点でテーマに少し変更を加えるものも出た（１名）

７．４年次春学期：１時限に１名ずつ、提出済みの30枚の原稿を発表する。他のゼミ生からの質問、コメントについてはこれまでと同様の形式で。このとき、原稿をそのまま音読する方法で発表をしてもらう――音読することによって、論理構成や文体の不備等を明確に意識させる。

８．４年次９月中旬：春学期の発表をもとに改訂を加えた原稿を卒論の最初の完成版として提出する。この時点で、注などもできるだけ完成させた形にする。

９．４年次秋学期：１時限に２名ずつ長滝による個別指導を行い、それにもとづいた改訂版を順次提出する。メールによる指導も随時行う。各ゼミ生の原稿は、「前書き」をバージョン０として、現時点でだいたいバージョン７から９程度（必要に応じて途中で長滝による個別指導を入れ、それを参考に原稿修正もしている）。

１０．10月26日現在：ほぼ仕上がっているゼミ生が３名程度、完全に遅れている者が２名。今後、卒論の提出版が完成し余裕のあるゼミ生には、プレゼンテーション用のパワーポイントを作成してもらう。パワーポイントのかたちにすることで、論理構成の不備が明確になるという効果も期待できるから。

（注） 編集の都合上、経験交流会で配布された資料中の卒業生の実名を伏字またはイニシャルに変換させていただいています。（教育事業推進委員長）

第12回 経験交流会	演習科目の指導法－卒論指導を中心として－	’11・11・2 会議棟大会議室	文学部 酒井 敏

「はじめに」

約二十年間、文学部で卒論指導を担当してきた。特別な指導法を実践しているわけではないが、文字通り「経験」をお話しすることで、参考に供せる実例が一つでも提示できれば、と思う。

「発表要旨」

三、四年次の二年間、ゼミナールを通して行う卒論（卒研）指導は、自ら問題を発見し、ふさわしい方法でそれを解明、他の人にもわかるように資料に基いて発表・文章化できる能力を養成する場であり、卒論の完成によって、生きてゆく自信を獲得するとともに、自らの将来を拓く契機を得ることを目的とする。

「発表手順」

(1)国文学科時代の実践

(2)日本文学科・言語表現学科の二学科体制になってからの実践

(3)まとめ

「発表本文」

(1)国文学科時代の実践

酒井敏ゼミナール

- 『壬生義士伝』——小説と映画、それぞれの物語—— ○○○○
- 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』を読む ○○○○
- 谷崎潤一郎の文学と幻想の女性——『春琴抄』を中心に—— ○○○○
- 太宰治女語り考——「女生徒」を中心に—— ○○○○
- 北村透谷——人生と蝶の詩—— ○○ ○
- 『痴人の愛』と『石にひしがれた雑草』——その結末から見た作者の性格—— S K
- 後期の大江健三郎——転換点としての『燃え上がる緑の木』—— ○○○○
- あさのあつこ『バッテリー』論——作者のこだわりと人気の秘密—— ○○○○
- 吉川英治『宮本武蔵』を読む——作品の魅力と人気の要因—— ○○○○
- 樋口一葉の生涯と明治の女性 ○○○○
- ライトノベルの諸問題——ジャンルの定義と作品分析—— ○○○○
- 『或る女』論——葉子のキャラクターをめぐって—— ○○○○○
- 田山花袋『蒲団』の比較文学的考察——ツルゲーネフなどの外国文学の受容と『新しい型』の系譜について—— M Y
- 『舞姫』における鷗外の自我 ○○○○
- 三島由紀夫『春の雪』——現代に生きる三島を考える—— ○○○○
- 南吉童話はいかに読まれたか ○○○○

国文学科最終年度（63年度）の卒論一覧。三年次に明治〜昭和の短編小説、四年前期に同時期の長編小説を読み、後期に卒論の中間報告。テーマが比較的まとまっている。（成功例・失敗例の紹介）

(2)二学科体制になってからの実践

酒井敏ゼミナール

- 『春琴抄』——表層に浮かぶリアリティー—— ○○○○
- 中短篇作品に探る江戸川乱歩の魅力 ○○○○
- 推理小説の魅力——明智小五郎と金田一耕助を中心に—— ○○○○○
- 佐多稲子の描く女性と家族——女性の視点から見た家族とは—— ○○○○○
- 錯覚の太宰治——その普遍的魅力—— ○○○○
- 唯川恵の作品にみられる変わるものと変わらないもの ○○○○
- 岡本綺堂の怪談作法 ○○○○
- 黒澤映画に見るリアリティーと娯楽性——『七人の侍』を軸に—— ○○○○○
- 作家・野坂昭如論 ○○○○
- 落語の笑話——他の芸能と比較して—— ○○○○
- 「表現の自由」をめぐって——メディア別に考える—— ○○○○
- 谷崎潤一郎『卍』に見る恋愛論と美人論 ○○○○
- 遠藤周作論——なぜキリスト教なのか—— ○○○○
- 小野田寛郎が伝えるもの——戦後、日本が遂げた革命的変化とともに—— ○○○○○

日文 ← → 言表

- 小説作法——娯楽に毒された読者を対象として—— ○○ ○
- 一人ボイスドラマをつくる——サンプルボイスを用いて—— ○○○○
- 国語科教科書は何故戦争の加害性を伝えないのか ○○○○
- 山口智子作詞の校歌を歩く ○○○○○
- ガブリエル・バンサンを通して見る絵本メディア ○○○○
- 小説と『ひきこもり』 ○○○○
- 翻訳推理小説の日本語 ○○○○○
- 有吉佐和子『恍惚の人』論——ベストセラーの時代背景と仕掛け—— ○○ ○
- ライトノベル消費論——現象化するライトノベル／三頭身化されるキャラクター—— Y Y
- 純愛映画が映す時代——そこにある変わらないもの—— ○○○○

上掲の翌年、二学科体制最初の年の卒研一覧。三年次春学期に小説と映画の比較研究、秋学期に'89年の『朝日新聞』「文芸時評」を共通素材とする研究。四年次は、春学期に卒研の構想発表、秋学期に中間報告。

テーマが多様化し、創作も登場する。指導する側の準備、ゼミでの質疑応答・討論を活発に行うための工夫。（裏面の拙文「新聞記事」および『FDニュース』No.1掲載拙文参照。成功例・失敗例の紹介）

(3)まとめ

学生の興味・関心の多様化によって、教員が訓練を受けてきた研究・論文作成のノウハウだけでは対応できなくなっている。レポートは丁寧に添削して返却（対話と具体的指導）、ゼミでは学生が知的好奇心を高め、学習意欲を維持・展開させられるよう配慮してアドバイスを行う。教員がまず面白がるのがポイント。

（使用テキスト・文献）

中京大学国文学会「会報」・3・17、平19・3・20）。25、26（平18

拙稿「授業参観の効能」。（「FDニュース」1、23・4・1）。

ラノベ世代と向き合う

未開拓の分野 学生と格闘

酒井 敏
中京大教授

さかい・さとし　59年千葉市生まれ。早稲田大大学院博士課程単位取得退学。専門は近現代文学文化。論文「松崎直臣の表象をめぐって」、著書『森鷗外とその文学への道標』、編著書『愛知の児童文化』など。

ライトノベル（以下ラノベ）が、学会の注目を集め始めた。日本近代文学会は機関誌に「ライトノベル研究会の現在」と題する活動報告を掲載し、日本児童文学学会は、ラノベを含むサブカルチャーをテーマとする大会を今秋、名古屋で開催する。

では、ラノベとは何か。その正体を端的に述べるのはなかなかむずかしい。ひとまず、①中高生をターゲットとした②エンターテインメント系の物語で③特定の出版社から刊行される文庫を中心とする④アニメ風のイラストで飾られた比較的廉価な書物である、と定義しておく。

卒論テーマに続々登場

ラノベは1990年代から急速に読者層を広げ、現代の若者文化を考える上で無視できない存在に成長した。シリアス調ありコメディー調あり、学園・恋愛・SF・ファンタジー・ミステリー等々、スタイルも構成要素も多様な物語であり、さらにアニメやゲームを始め、多くのジャンルに越境してメディアミックスの状況を呈している。未開拓の魅力的な分野として学会が注目するのもうなずけよう。

学会において未開拓とは、学生のお手本になるような、研究方法上のスタンダードが存在しないことを示す。しかし、ラノベで卒業論文を書きたい、という学生は数年前から続々と私の前に現れている。

現在の学生たちは、書店の一角（多くはコミックの近く）をラノベがしめるようになってから、中高生時代を過ごした。「はじめて読んだ小説は、ラノベでした」と自然に言える「ラノベ世代」である。卒論のテーマにラノベを選ぶ学生が登場するのも、当然といえば当然だ。

ならば、そのニーズに応えなくてはならない。かくて、ラノベの読書量においては指導教員をはるかにしのぐ「テーマはラノベ」君（なぜか全員男子）たちと向き合うこととなる。彼らはどんな卒論を書いたのか。以下、四人の実例を紹介しよう。

ライトノベルと『鹿男あをによし』

創作・批評さまざまに

ラノベ作家を志し、投稿作品が入選した経験も持つA君は、読書する習慣のない、他の娯楽に毒された人々でも夢中になれる小説の書き方を探り、実作も示した。結論は、エンタメに徹したサービス満点のラノベ。作品と合わせ二百数十枚の面白い卒論だったが、今は純文学を目指している。ゼミで吉行淳之介に触れ、さかのぼって第一次戦後派まで読み進むうち、ラノベ作家たちの文章表現力に満足できなくなってしまったのだ。ディープなマンガ読みからディープな小説読みになった指導教員同様、豊富なラノベの読書量が未知の領域を消化できるリテラシーを育てていたのだろう。

一方、A君に匹敵する読書量を持ちながら、創作ではなく研究に向かった学生もいる。

B君が卒論で目指したのは研究対象を明確に打ち出す『小説神髄』ならぬ『ラノベ神髄』。指導教員も、ラノベ作家や作品をしごたま覚えさせられた。現在では類書があるが、力作180枚は、ラノベ史構築を目標に大学院に進んだ彼の貴重な基礎体力である。

C君は結果を出せなかった。ラノベだけ、しかも読書量が少なかったのだろうが、好きなラノベの作品論を書こうとして、堂々巡りに陥ってしまった。ラノベは一義的に解釈してもつまらない。例えばポスト・モダンの状況など、背景をなす現代文化の諸問題を取り込んだ方が面白く、作品自体の輝きも増す。ナイーブなラノベ読者のまま、一般文芸の研究方法を援用して

そこにD君の卒論が現れた。佐藤友哉のミステリー『フリッカー式』が取り込んでいる多くの先行作品を、小説からアニメまで注釈作業を通して種明かししていくこの卒論は、途中から論ずる主体が分裂する小説に化ける。サブカル・ラノベ論の旗手東浩紀が、ラノベ作家の桜坂洋と合作して一般文芸に突きつけた野心作『キャラクターズ』を意識した手法だが、ずいぶんと無手勝流だ。とはいえ、妙に納得した。

90年代に中高生だったラノベ世代は、伝統的なリアリズムに縛られず、先行作品を自らの創作に積極的に利用する。このようにしてエンタメを紡ぐ手法は、ラノベではないが、漱石の『坊っちゃん』を下敷きにした万城目学の『鹿男あをによし』などにも顕著であろう。直木賞を受賞した桜庭一樹や有川浩など、ラノベ作家の一般文芸への越境、両者の融解が言われるが、実は読者層としてのラノベ世代の広がりが、両者を歩み寄らせていたのである。

学会のラノベ研究は緒についたばかりであり、指導教員にもお手本はない。開かれてゆくだろう可能性に注目しつつ、まずはこの手法の分析を回路に、ラノベ世代との格闘を続ける。

演習科目の指導法～卒論指導を中心として～

経済学部
白井正敏

演習科目

- 1年次：入門ゼミ（必修科目2単位）春
- 2年次：専門ゼミ（選択科目2単位）秋
- 3年次：専門ゼミ（選択科目4単位）通年
- 4年次：専門科目（選択科目4単位）通年

入門ゼミ

•目的；導入教育、履修科目指導、相談、個人票作成、大学と高校の違い等、友達作り

•指導内容；情報関係、メール、WEB、ワープロ、パワーポイント作成方法、

•演習指導；報告者義務、報告資料作成、発表方法、質疑、ディスカッション方法

•テキスト選択が重要、入門ゼミの経験が今後の学習、ゼミ選択を決定、

2年次演習

- 本年度より、内定選抜方式を導入：学生はエントリーシートを複数の希望ゼミに提出、教員が内定書を発行する。内定を得たゼミから学生が最終的にゼミを決定（WEB利用）
- 本年度は初年度ゆえ予想がつかず、ゼミ人数に大きな歪みが生じている。
- 指導方法はゼミの専門科目の導入のための学習、主体性を重視

3年次演習

- 各自の研究テーマを選択を意識した演習指導
- より高度な共通テキストによる学習および各自の選択した個別のテキストの内容報告
- 知ることより考えることを経験；ディスカッションを重視。個別テキスト報告に活気。
- 秋以降；卒業論文テーマを決定、資料検索、収集

4年次演習

- 卒業論文作成
- 個人研究、グループ研究；経過報告を中心として
- 卒業論文作成成果物；A4用紙30枚以上（グループ研究60枚以上）締め切り12月最終ゼミ日
- 卒業論文提出をもって成績評価
- 1月ゼミ日：卒業論文発表会開催（open参加）

演習科目の問題点

- 学生に目的意識がない；何に興味があるか、何を研究したいか：ゼミ選択時から問題
- 主体的学習；報告、ディスカッションができるまでに至らない。教員にたいして答を要求。
- 仲間作りの段階で良とすべきか。
- 卒論の必修化の問題点；途中挫折組の処置

- ゼミ室の不備；通常講義と演習が同じ
- ゼミとしての学習の場がない。資料の共有化、蓄積が不可能。縦関係が成立不可能。
- 学生生活の上での演習科目の重要性に対する認識がない。面倒だから選択しない学生がかなりいる。必修化が必要（反対論あり）

卒論指導について

国際教養学部　安村仁志

これまでのゼミ・卒論指導

社会学部ー現代社会学部ゼミの場合

二年に一度ゼミ募集　２年次から４年次まで　　３年目は４年次(ゼミ・卒論)と新たな２年次ゼミを担当

ゼミ生数　平均23名ほど、最大27名

かつては、４年次ゼミ・卒論が選択であった　／　現在は、４年次までゼミは必修、卒論は選択

選択である卒論をなるべく全員に書くよう指導することに気を配った

２年次より、大学での学びの目に見える成果としての卒論を書くよう勧めていった

⇒　毎回ほぼ全員が卒論を書いて卒業していった

他に、国際英語学部(国際英語学科)ゼミの担当もあり

卒論指導の道のり

社会学部時代の大まかなテーマ：表象文化　　現代社会学部でのテーマ：宗教文化史

２年次：表象文化／宗教文化史について学びつつ、グループ発表を通じて関心を深められるよう指導

３年次：個人発表を年２－３回設定し、それに取り組みつつ卒論で取り上げるテーマをイメージさせていく

４年次：仮テーマを早めに設定し、資料集めに入るよう指導

個別相談・指導を随時行う

中間発表を何回かおこなう

１月初めの提出に向けて、下書きのチェック

場合によってはメールで原稿の送付・チェックしての返還を継続

提出後、ゼミ内での卒論発表会を実施　　公開制をとっていたが外部からの参加者はほとんどなし

★卒論はカリキュラム上選択であるため、資料集めなどで行き詰まり感を持つと、すぐに執筆をあきらめ(他の科目履修で代替する)ため、書き上げることの意味を説きつつ、励まし、必要なアドヴァイスを与え続けることに努めてきた

書き上げた後はほぼ全員が「書いてよかった」と言うことに励まされてきた

卒論指導の方針

・卒論は、文科系の学生にとっては、４年間の学び(専攻)のまとめであるのはもちろん、目に見える成果(物)であることを重視

・卒論は、形としての成果であるだけでなく、専門分野での探究力の向上・論旨展開法の習得・文章表現の練磨などの、いわば《総合的》学習成果であることを考慮

今日、大学(生)に求められている、「大学での学び」の《見える化》への対応のひとつになる

・**総じて「卒論指導」を大学教育の一環として位置づけてきた**

・大学院進学希望者(何人か大学院に進学)にとっては重要なステップであり、特別に懇切な指導に心がけた

卒論指導の難しさ

・学生の取り組むテーマの多様性への対応

・学生の資料集めの指導　　安易にネット検索だけに走ることの戒め

・文章のチェックに相当時間を要する

・テーマが異なるゼミ生の連帯意識の維持

★それでも、執筆に取り組む過程での学生の成長を実感できる《楽しみ》がある――それが卒論指導かと思う

★全学部で卒論を必修にすることが望ましいのではないかと思う

経験交流会アンケート

所属　　学内（国際教養学部・国際教養学部以外）・学外（　　大学）

1．経験交流会を通じて知りたいことをお書きください。

2．パネリストの先生方にお聞きしたいことをお書きください。

ご協力ありがとうございました。

中京大学 国際教養学部 教育事業推進委員会